南インド農村部における持続可能な地域振興

～ NGO・YFAの活動を事例にして ～

*小金澤　孝　昭・**福　澤　隼　人・***吉　成　安　生

Sustainable Development for the Rural Area in South India.

KOGANEZAWA Takaaki. FUKUZAWA Hayato. YOSHINARI Aki

要　約

本研究では，南インドの半乾燥地域の農村地域で活動するNGO・YFAの実践を通じて，開発途上国における持続可能な地域振興の実際を検討した．本研究の課題の1つは，農民が貧困で，未組織な地域でNGOが20年かけてどのような手法で地域振興を進めてきたのかを明らかにすることであり，第2は地域振興によって農民とりわけ，女性達がどのように変化してきたのかを明らかにする．前者については，半乾燥地域での灌漑・保水技術の導入や乾燥に強い作物選択と定着技術の導入によって，この地域の農業経営を安定化させた．またMC(マイクロクレジット）の活用によって，農業経営の資金や住宅資金の確保を行ってきた．後者については，女性の意識や家族の意識並びに集落の意識をも変えさせてきた．両者の実現には，NGOによる農民や女性の組織化があった．農民や女性達の協同化が地域づくりの主要因となっていたのである．

Key words：南インド，持続可能な開発，NGO，マイクロクレジット
女性のエンパワーメント，協同化

I　はじめに

2002年の南アフリカ・ヨハネスブルグサミットで日本政府とNGOが共同で提案した「持続可能な開発のための教育」が2004年に国連で採択され，2005年1月より「持続可能な開発のための教育の10年」(以下ESDと呼ぶ)がスタートした．現在あらゆる教育を「持続可能な開発のための教育」に結びつけていくことが望まれている．地球資源が限界を迎えているいまこそ，「持続可能な開発」の概念を実行していくことは大変意義のあることである．貧困からの脱出は望むべきことであるが，目指す方向は「持続可能な」という視点である必要がある．また，「教育の10年」の提案はNGOが政府と共に行ったように，いまやNGOが影響力を持ちはじめている．ESDの事務局であるUNESCOが作成した実施計画では，NGOは政府と住民をつなぐ役割であるとされており，NGOの行動が期待されている．特に発展途上国のように政府の活動が地域に行き渡らないところでは，NGOの活動が政府機関・地方自治体同様な機能を果たしている．

発展途上国における持続可能な開発を議論する際に欠かせない視点として女性の地位向上がある．現在，全世界で貧困状態にある13億人のうち70%が女性で[1]，「貧困の女性化」が進んでいると言われている．

*　宮城教育大学社会科教育講座
**　NPO法人　環境保全米ネットワーク
***仙台いぐね研究会

UNDP（国連開発計画）は，「女性の間で貧困が増大しているのは，労働市場において女性が不利な立場に置かれ，社会保障制度や家庭内での女性の地位や権限が不当に扱われていることに原因がある」[2] と指摘している．「貧困の女性化」を脱却するには，途上国に住む女性自身が自らの生活を改善するための様々な能力を身につけること，すなわちエンパワーメントが必要であり，これは女性のみならず，男性を含む社会全体にとって重要であると考えられている[3]．そして今日，この女性のエンパワーメントは，国や地域など様々なレベルで模索されている．

本研究は，発展途上国で，持続可能な地域振興をNGOが主体となって進めており，特に女性の地位向上を進めている事例について地域調査をもとに明らかにすることを目的としている．本研究の調査地域として，雨期と乾期の格差が激しい南インドの農村地域を取り上げた．この地域へは，「半乾燥地域における農民の組織化と農業振興の実態」をテーマに，NGOの活動に注目して2003年から本格的に調査・研究を始めた．今回の調査報告は，2003年，2004年の予備調査を踏まえて2005年夏に行った調査に依拠している．対象地域は，南インド・アンドラ・プラデーシュ州マハブブナガール県を取り上げ，対象活動はこの地域で実践を行っているNGO（非政府組織）のYouth For Actionの取り組みとした．

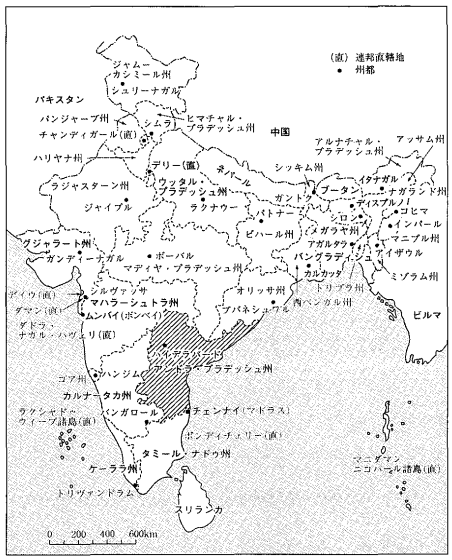
本研究の具体的な課題としては，第一に現地NGOが住民を組織し，どのように持続可能な地域づくりを作り上げていったのか，そのプロセスを具体的な活動を元に考察する．第二は女性たちが組織化し，様々なグループ活動を実施する中でどのようにエンパワーメントするのか，さらに活動を通して見られる女性たちの変化が家族や地域にどのような影響を及ぼすのかを明らかにすることを目的とした．

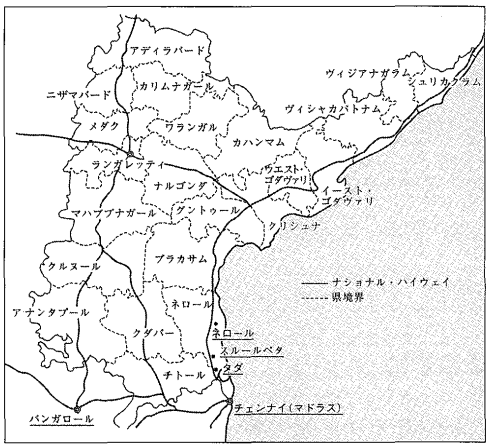
Ⅱ　南インドにおける農村地域の特徴

1．南インド　アンドラ・プラデーシュ州の地域的特徴

一般的に南インドと呼ばれる地方は，広義には北緯24度線，ちょうど北回帰線の通るあたりにそびえるビンジア（Vindhya）山脈の南側とされ，狭義ではドラヴィダ（Dravida）語族[4] が多い南部4州，つまりカルナーカタ州，タミル・ナードゥ州，ケーララ州，そしてアンデラプラデーシュ州の事を指すとされる．ここでは，南インドをこの4州として定義しておく（図1）．

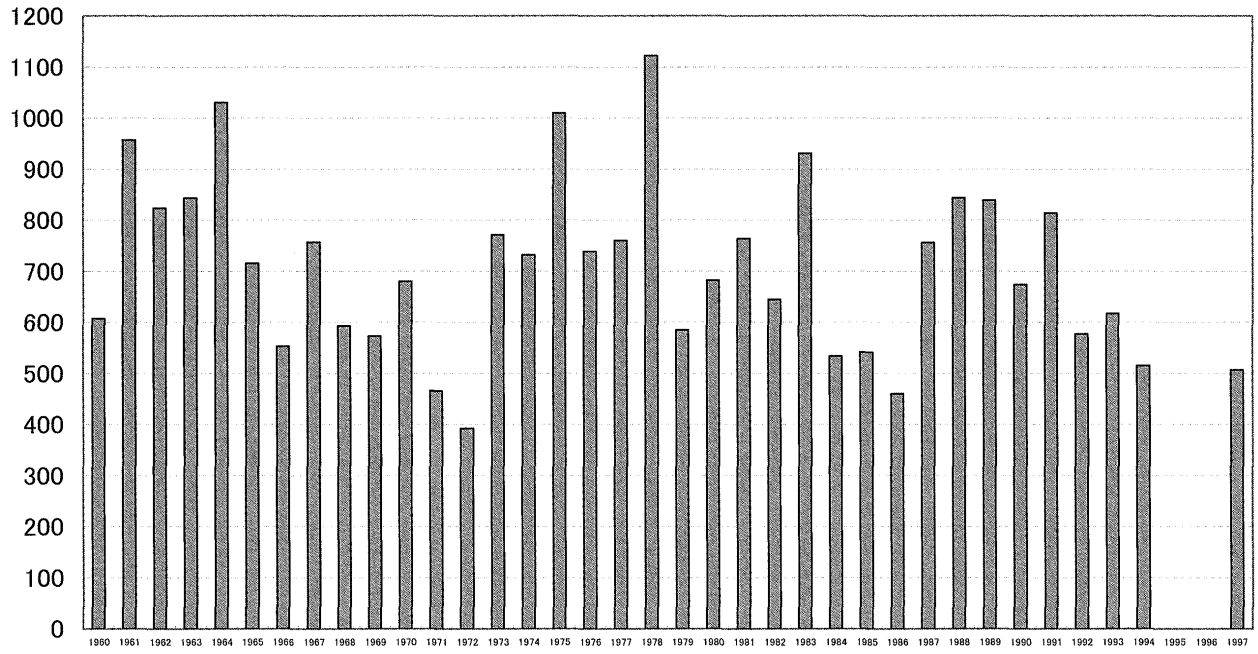
図1





アンドラ・プラデーシュ州の年間降水量の月別変化をみると「雨季」「乾季」の差がはっきりとしている．南西モンスーンの卓越するカリフ期には約750mlの降雨があるものの，北東モンスーンの卓越するラビ期は約100mlと，カリフ期とラビ期の差が約7.5倍あるほど大きく開いている．「カリフ（Kharif）期」は南西モンスーンの時期であり，一般に「雨季」と呼ばれる時期である．一方「ラビ（Rabi）期」は，北東モンスーンの時期で，「乾季」と呼ばれる時期である．アンドラ・プラデーシュ州において，雨の降る時期はラビ期がほとんどで，この時期にどれだけ雨が降るかが一年間の

図２　マハブブナガール県降水量（1960－97）



※　1995年と1996年の値は欠測　　資料：YFA

降水量を決めるといっても過言ではない．つまり日常生活や農業に必要な水も，この時期の降水量により左右されるということである．

アンドラ・プラデーシュ州の人口は7,572万7,541人（2000年）で，州の面積は275,068平方キロメートルである．州は，３地域（アンドラ沿岸地方，テランガナ地方，ラヤラセーム地方），23県に分けられている．アンドラ・プラデーシュ州は，インドの中でも開発が遅れている州とされており，特に，マハブブナガール県の位置するテランガナ地方は，他の二つの地方に比べて開発が遅れた地域であると言われている．アンドラ・プラデーシュ州では，州の総労働人口の約94%が農業労働や建設労働などに従事しており，これらの労働者は特定の組織に属していないため法律の保護を受けることが出来ず，そのほとんどが貧困状態にあるという．Bhalla (2000) によると，アンドラ・プラデーシュ州の農村地域の貧困は特に深刻で，農村地域における貧困層の約90％は農業従事者に集中しているという[5]．また，農村地域における女性の臨時雇い労働者の割合は，男性のそれに比べて高く（男性44%，女性53.8%（2000年）），女性の雇用は不安定であることがわかる．それに加えて，農業労働の平均日給をみると，女性の賃金は男性よりはるかに低い（男性48.76ルピー，[6] 女性35.91ルピー（2001年））．

２．マハブブナガール県の概要と農業

マハブブナガール県は，アンドラプラデーシュ州テランガナ地方の南端に位置する．人口3,509,182人（2000年），面積18,432km²で，日本で比較すると岩手県より少し広い面積である[7]．西端はデカン高原に属し，州としても西端の境界線が走っているところでもある．今回調査対象地域としたコタコタ村はマハブブナガール県中央部よりやや西よりに存在する．まず，気候についてみてみよう．年降水量のほとんどがカリフ期に集中している．また，降水量は安定しているわけではなく，モンスーンの時期に雨が降らず旱魃となる年もある．マハブブナガル県の1960-97年の降水量統計によると（図２），数年に一度，降水量が前年に比べ急激に落ち込んだりするなど，降水量の不安定さが伺える．また土地利用を見ると，土地面積の約半数の49.8%が農耕地となっていることがわかる．同じくアンドラ・プラデーシュ州の coastal andhra region，タダ（Tada）村で調査を行った山本（2000）は⑴教育⑵医療⑶住宅⑷郵便・電話⑸交通⑹村に通じる道路⑺電力の視点より調査を行った．これに基づいて対象地域を整理すると表１となる．⑴～⑶の面から

表1　マハブブナガール県の概要

⑴教育	識字率29.58%である。(州平均44%) 2001年には45.53%に上昇。
⑵医療	農村:簡易医療を行う施設のみ。巡回医師のいる村も。公立病院はあるが絶対数が不足。
⑶住宅	農村：わらぶき屋根、泥の壁など多い。床においては全体の52.8%が泥土であり、衛生面での心配
⑷電話	一般家庭まで固定電話の普及が進んでおらず、「電話屋」という商売が成立している。
⑸交通	州都ハイデラバードに通じる国道あり。自動車で約3時間。鉄道もあり同じく3時間で結んでいる。
⑹道路	主要な交通量の多い道路は比較的整備。村人たちの住居に近づくと、舗装されていない。
⑺電気	中心部をはじめ電柱と電線が見られた。電気はあるが頻繁な停電に悩まされる。

見ると，現地の人間は字も読めず，医療もまともに受けられず，また，不衛生な住宅に住まざるを得ない状況だ．これは識字率の低さが大きな原因となる貧困がもたらすもので，負の悪循環に陥っていることが推測される．⑷～⑺（解釈によっては⑶も含むだろう）はインフラに関するものだが，整備が十分でない状況がうかがえる．

マハブブナガール県ではどのような農業が行われているのだろうか．降水量も安定していないこの地域の問題はなんといっても降雨に頼る農法であるということである．その対応策としては①降った雨を何らかの方法で長持ちさせる②農地自体を改良する③乾燥地に適した作物・植物の選択とそれを植えることが考えられる．しかしながら，マハブブナガール地区でこのような乾燥地域に適応した農業技術が伝えられているところは少なく，いまだに農民は化学肥料を投入し[8]，土地に適さない作物を植え，乾季や降雨に振り回されながら少ない収量を得，また天候に依存する不安定な生活を送っている者が多い．政府機関が末端まで機能しておらず，対策が遅れている現状の下，現地の農村出身者を中心としたNGOが，貧困の撲滅を志し，農民支援をその手段としてとし立ち上がった．これが，NGO Youth For Actionである．

この地区の主要産業は農業であるが，2001年の段階で灌漑設備がある耕作地はわずか18.8%にすぎず，アンドラ・プラデーシュ州全体の33.4%と比較しても，その割合が低いことがわかる．そのため，農業の大部分を雨水に依存せざるを得ず，農業生産性が低い．また，度重なる干ばつにより農業収入が不安定で，生計手段の確保が困難な地域ともいえる．さらに，農業の商業化などによって農地が乱用され，土地の劣化が進んでいる．このような自然環境の悪化は，農業生産性の低下を招くとともに食料価格の高騰を引き起こし，貧困層の食糧確保を困難にしかねない．貧困が深刻なこの地域では，仕事を求めて出稼ぎに行く男性が多い．男性たちが出稼ぎに行っている間，女性たちが村に残り，家庭内外の責任と役割を担っている．女性は，家庭内において，料理，洗濯，掃除などの家事，水運び，薪取りなどの資源の収集，育児，世帯の老人（夫の両親）の世話などを担当している．また，少しでも収入を得るために，悪条件かつ不安定な労働環境のもとで農作業に従事している．干ばつによる天然資源の枯渇や土地の劣化といった自然環境の悪化は，水汲みや薪取りなどを担う女性にさらに多くの負担を強いている．女性は，子どもの頃からこのような家庭内外の仕事を手伝うため，教育機会が男性に比べて少ない．また，家庭において女児の食事は後回しにされることが多い．このような幼少期を過ごした女性は権利意識や自信が乏しく，社会においても低い地位にある．また，女性は交渉能力に欠けるとみなされ，家庭やコミュニティーにおいても発言力が与えられないことが多く，意志決定過程に参加することがほとんどできないでいる．このような女性を取り巻く状況の背景には，インドの男児選好や男性重視の社会構造があると言われている．男児は，神からの贈り物とされ家庭の財産として扱われる．一方，女児は結婚の際に持参金を用意しなければならず，それが家計を圧迫してしまうことなどからその誕生は好まれないという．このような文化的背景が女性の位置づけを決め，女性の置かれている状況は決して良いとは言えない．それにも関わらず，男性たちの不在期間が多いこの地域で，女性が家庭内外の一切の責任を担わなければならない．貧困から脱却するためには，家庭や地域の担い手である女性たちが力をつけること，すなわち女性たちのエンパワーメントが必要と言える．

Ⅲ　持続可能な地域づくりとNGOの実践

1．NGO・YFAの全体像

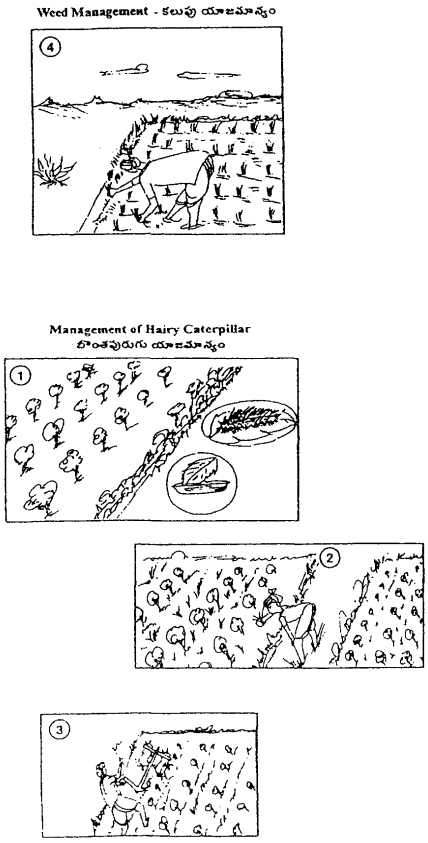
「貧困の撲滅」をテーマとして，主に農村における

持続可能な地域づくりの支援を行っているのが現地NGO Youth For Action（以下 YFA）である．YFAはインド現地のNGOで，スタッフの多くは農村出身者である．住民の70パーセントが農業に従事しているインド農村では，農業に関する正確な知識を持っているかいないかは農業生産，ひいては売り上げにつながり，生活を送る上で大きな鍵となる．そこで YFA では農業技術に関する知識を講義し，実際に身体を使ったトレーニングも行う．また，農村で暮らしている女性が貧困の削減に非常に重要な鍵を握っていると考えており，女性の自立にも重点的に取り組んでいる．YFA の使命を実際に達成するため，農村地域で実際に活動するスタッフがいる．これらのスタッフのいるところがマハブブナガール県コタコタ村の Krish Vigyan Kendra（以下，KVK）と呼ばれる研修兼研究施設である．KVKの施設は，大きく分けて(1)研修・研究施設，(2)ポンプ施設，(3)土壌分析施設，(4)堆肥実験施設，(5)実験農場，(6)育苗施設に分けられる．

厳しい自然に立ち向かっていくために，YFA が農民に対してしたこと－それは仲間を作ることであった．コタコタ村は非常に乾期に乾燥が進む地域である．その厳しい自然条件で農業を進めていく際に，人間一人の力ではとうてい太刀打ちできない．そこで，ともに頑張ろうとする農民を集め，励ましながら出来ることから頑張ったのである．やれることからやりながら自分たちのモチベーションをあげていった．また，SHG（Self Help Group：生活自助グループ）や MC（Micro Credit：小口金融）においては，いままでカースト制度や男性尊重の文化のなかで低く見られていた女性たちに焦点を当て，女性のグループ化を促進した．その結果，金銭管理の帳簿をつける必要性があったことから，女性が必死になって文字を覚えたり，計算の能力，資金の運用能力が付いたりするなど個人能力が開花した．また，収入が増えたことで，男性（夫）に認められるようになったりするなど社会的地位の向上という結果もあった．さらに単純な金銭管理グループから成長し，村の問題や政治談議をはじめるものが出てきたりするなどグループ全体が単なる収入を得るため，貸付を受けるためのものから政治的，民主主義的な意味合いを持つ自治組織へと成長が見られた．

次の段階は，いかに気候条件に耐えるかということである．調査地域が太陽の回帰に伴い雨季と乾季が

図3　農民向けのテキスト



出典：Extension needs of Sustainable Dryland Agriculture より筆者一部抜粋

はっきりしている乾燥地域だということは先述した．ゆえに雨水を利用した環境改善が求められるのだ．その具体的事例が watershed（集水域管理）プログラムである．雨水が得られないからといって，農民があちらこちらで井戸をバラバラに掘っても意味が無いのである．ここは組織化で得た団結力を使って，集水域において協力して水系を確保することが大事なのである．乾季の間でも，この方式でとどめた地表の水や地下水を使って農業を行うことが出来れば，農民の暮らしはよりよくなることであろう．乾季は，厳しい太陽が照りつける．しかし目線を変えてみると，植物が育つ条件のうち水以外は揃っている．水を確保する努力をすることにより，欠点と思える乾燥地が農業適地ともなりうる．水が確保できるようになると，今度は実際の農業において「何を植え」「どう育て」そして「収益を上げるか」というところが重要となってくる．収入がなければ，農業で生活を送ることは難しくなるか

らである．作物の選択においては，その土地で栽培できかつ，「利益の出る種」の選択が重要となる．この作物の改良や研究についてはKVKの研究施設で実験栽培や成長点培養などが行われており，YFAのスタッフにより農民にトレーニングという形で広められている．さらに，YFAではいくつかの農業用の教科書を作っている．テルグ語（現地語）と英語，そして字の読めない農民にも理解できるようにイラストでの説明があり，配慮がなされていた．（図3）教科書の内容は，化学肥料に依存することから脱却し，自然由来のものや，生き物の捕食関係を利用した殺虫方法など，農業を環境に負担を与えない（環境の回復力に見合った）農業，持続可能な農業への転換を諭している．

また，農業生産物で出た残りかすや雑草，牛の糞からできる有機堆肥は，身の回りにあり，ついついごみとして放り投げてしまいがちなものたちを上手に利用した例である．コストはほとんどかからないし，有機堆肥は水をよく含み，栄養価も高い．牛糞を用いたメタンガス発生システムが導入されている．牛小屋の近くに牛糞を集め封をし，発酵したメタンガスの圧力でパイプラインを通じて，隣にある家のガスコンロが使用できるという家が実際にあり，牛糞を用いた循環システムの可能性が感じられるものもあった．

2．YFAのESD戦略

YFAの持続可能な地域振興の進め方をまとめると表2のような構成となっている．YFAが農民支援をする際にまず留意していることが，住民の組織化である．ほとんどすべての農業支援・生活支援の活動は，グループに対して行われる．1グループの人数はおおよそ10人～15人程度である．組織化の理由については，団結することによる共同で頑張るという意識，さらには内部での自己研鑽，さらには住民自治を目指している．住民の組織化は基本的にどんな活動においても基本となるのである．マハブブナガール地区での農民は厳しく，不安定な自然環境に振り回されながら生活を送っている．不安定な農業を，できるだけ安定化させていく方法として，まず欠かせないことが水の安定確保である．雨季／乾季という気候条件は人間の手で変えることが出来ないが，水管理の方法を改善しできるだけ雨季の水を乾季まで残しておく方法である．乾燥という条件を完璧ではないにしろある程度克服するのである．そのうえで有機農業をすすめていく．有機農業は環境に負荷を与えない，持続可能な農業として重要である．また，有機農業で育てられた作物は，従来の化学肥料によって作られた作物よりも付加価値が付くのは日本と同じ状況で，収入増加につながる．しかも，有機農業は自分たちが農業生産で出た残りや牛の糞など身近な材料で出来る．あとは的確な技術を伝える人間がいるかどうかであり，YFAのスタッフがその役割を担う．

表2　YFA活動の概要

活　動	概　　要
組織化	貧困脱却、改善を望む農民のグループ作り。自治組織に発展した事例も。
水・水源確保	乾燥地という条件を克服するための水確保を、いくつかの技術を組み合わせ面的に展開する。
農業指導・有機農業化	収量の増加、高価格販売、低コストを実現する。また持続可能な農業のために、土地に、人間に優しい農業を目指す。
農村基盤整備	住宅の建設資金貸付、井戸、照明、コミュニティホール整備。
マイクロ・クレジット	一般銀行から貸付を受けられない農民(主に女性)がグループを組み積み立てを行い、その金額を担保にし、NGOの仲介で銀行から融資を受け、生活や仕事に役立てる。

出典：調査により筆者作成

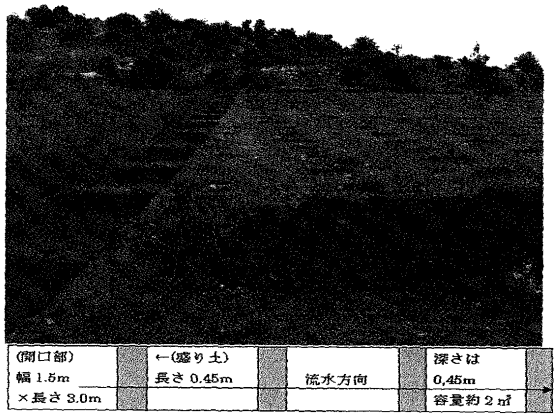
安定的な収入の基盤ができ，ある程度農民の貯蓄もできてきたものに対しては，住宅建設などの生活面全般での支援に移っていく．YFAでは希望する住民で，返済能力が認められた農民に対してはローンを貸し付けたり，一部の建築資材を無料で貸し付ける．また，自立した女性を目指すために女性への栄養教育や健康保険などの取り組みも行っている．

これらの活動を根底で支えているのがSHG（＝生活自助グループ）である．組織化という部分と非常に関係が深く，同じ村に暮らし，同じような背景を抱えているもものが十数人集まって，グループを組織する．調査では，SHGはMC（＝小口金融）を並行して行っている場合が多かった．MCは，グループ内で決めた金額を毎月積み立て，その金額を銀行にまとめて貯蓄する制度である．似たような制度では，ノーベル賞を受賞したバングラデシュのグラミン銀行が知られている．MCによって農民が必要最低限のお金を借りることができるようになり，農機具などの購入ができ，生活が向上するなどのよい例がたくさん聞かれている．

3．持続可能な農業のためのYFAの農民支援

雨季に降った水の確保を重点に置いたトレーニングとして，YFAではwatershedという方法に取り組んでいる．これは流水域全体の水を広範囲で確保する，総合的な水管理の方法である．地形や集水量によって，いくつかの方法を組み合わせている．以下その方法について詳細を見てみよう．bounding（堀）は比較的安価で単純な技術でできる方法である．Boundは境界を意味する．雨が降り，緩やかな傾斜に沿って流れてきた雨水は，マスにたまりながら，まるで障害物競走の下流へと流れていく．たまった水は，ゆっくりと時間をかけて地下に浸透する．結果，地下水位が上昇するなど水へのアクセスが容易になる（写真1）．

写真1　block boundingの実際と模式

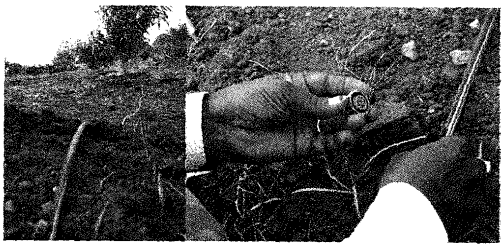


（出典：筆者撮影）

土地のなかでも下流，雨水が集まり水の流れとなり，さらにその流れが幾つか集まり，大きな水の流れになるところでは，石とモルタルで作った大掛かりな「チェックダム」と呼ばれる仕掛けである．これでboundingやfarm pond（農業ため池）よりもっと多い量の水を貯めることができる．

drip irrigation（点滴灌漑）は中に水の通っているゴムパイプを作物の根元に這わせる．そのパイプから水を染み出させて，まるで点滴のように水を滴らせて作物に水を与える[9]方法である（写真2）．この方法では，水の蒸発ロスがないのが特徴である．元に直接滴下するので，雑草の育つ余地がない．この方法により耕地面積に対する必要な労働者数，労働時間が削減され，水の損失率は少なくなった．drip irrigationはコスト削減に役立っている．

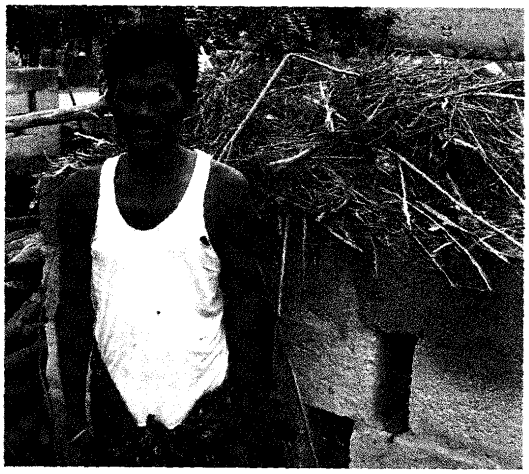
写真2　drip irrigation



（出典：筆者撮影）

有機肥料作りは，土壌および環境にとってよい方法である．有機肥料は落ち葉，雑草，農作物のくず，牛糞などで作られる．実際に有機肥料を利用することにより得られる利点は多い．例えば保水性が非常によい．また，微生物の存在が土壌の水分を保つなど，乾燥に対して都合がよい．また，栄養分が高く，同じ作物でも有機肥料を用いたほうが収穫量や作物のサイズが大きいという例もある．有機肥料を作る方法はいくつかあるが，この地域においてはindore heap method（インドール式堆肥処理法）やnadep compost method（ナデップ法）がよく使われている．どちらの方法も材料が身近にそろっていること，栄養価が高いこと，マニュアルが少ないなどの特徴がある．カニメタ村のHanumanth氏はYFAから「コンポスト建設」「殺虫剤の使い方」などのトレーニングを受けた（写真3）．

写真3　YFAの指導できたたい肥とHanumanth氏



（出典：筆者撮影）

作成に要したレンガは，YFAから無償提供された．砂やセメント，そして作成の手間は農民側の負担で作成した．コンポストの作り方はYFAから無料で指導を受けた．トレーニングも現地で，そして研修所で数

回受けた.

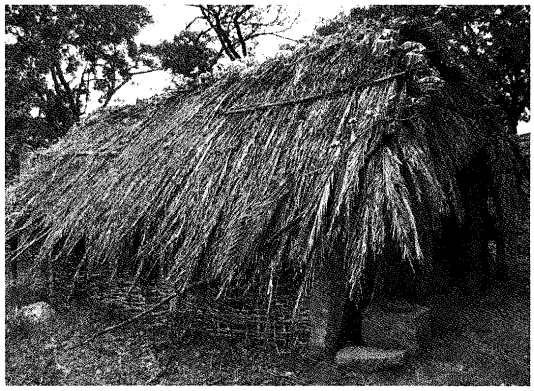
Hanumanth 氏はキャスター栽培を例にとって有機栽培のよさを教えてくれた．従来ここでは，1ac[10] あたりDAP[11] と呼ばれる化学肥料を100kg使用していた．しかし，YFAのトレーニングにより，化学肥料の使用時期などについて指導を受け，無駄な使用を減らすことによりDAP使用量を半分に減らすことに成功した．さらに有機肥料の導入で，DAP 使用量を15kg減らすことが出来た．収量を比較すると，DAPのみの収穫量は 300kg/acだったが，有機肥料を混ぜて栽培したところ，450kg/acに増加した．キャスターだけではなく，これから他の作物にも有機肥料を導入したいということだ．また，Hanumanth 氏は年に4回，堆肥を使っているが，1回（3ヶ月）で出来る堆肥の量は200kg．年間で200kg × 4回＝800kgの堆肥を生産できる．自家消費分は年間で300kgなので，残りの500kgは他の農家に1ルピー /kgで販売，年間計500ルピーを農業以外の副収入として得ているという．このように，有機肥料を使用することにより，化学肥料の使用を抑え生産コストが下がるばかりか，収量の増加につながり，さらに有機肥料販売により得られる副収入も得られるようになった.

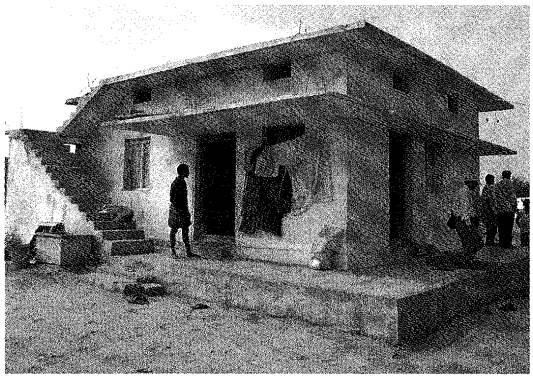
4．農村のインフラ・住宅の整備

さらに，YFA では農村の基盤整備屋住宅建設も進めている．YFA ではミーティングなどの組織化をハード面からもサポートするために集落に集会場を整備している．ここで SHG のミーティングが開かれたり，YFA のトレーニングが行われる．多目的施設として使用できるように，何もなく，平らな床が広がっているものが多い．意識の高い農民たちは自助グループ内での自治活動を行っており，農民の自治意識はこのような場所で醸成されるのであろう.

YFA の支援を受けている村には，必ず太陽光発電の街灯が立っている YFA では，水力発電や灯油ランタンに代わる太陽電池ランタンをすすめている．水力発電は導入，メンテナンスに費用がかかるし，灯油ランタンは灯油代やメンテナンス等の諸経費含め月40ルピーはかかる．インドでは電力へのアクセスはそれほど難しいものではないが，断続的な停電に見舞われる．太陽電池ランタンはバッテリーが切れたら日中の太陽光のある時間を使って充電すればよいのである．太陽光という，この地域の乾燥条件を逆手に取ったまさに持続可能な照明である.

写真4　草ぶきの家（上）YFA支援で建った家（下）





（出典：筆者撮影）

キスタギリ村では1986年から住宅建設支援が始まった．今では50戸の住宅が YFA の住宅用の建設資金貸付を受けて建設された．従来の家は，草ぶきの屋根に木の枝で組んだ壁，または土壁のものが多く，衛生的にもよくない（写真4）．しかしながら，住宅の建築費用はおよそ50,000ルピー（1ルピーは約3円）．農村の日雇い労働者の賃金が1日50ルピーであるから，非常に高額な金額であることが分かるだろう．そこでYFAが建築に対してその一部の金額を貸し出すと言うわけである．もちろん全ての農民が貸付を受けられるわけではない．建築を希望する女性は，所属するSHGグループ内に希望を出す．SHGのリーダーが希望を取りまとめ，YFAに代表して申請を行う．YFA側は助成の年収などから返済能力などを判断して審査を行い，実際の建築コストの80%を女性に貸し付ける．つまり，残りの20パーセントは融資によらない自己負担である必要が出てくる．ある程度貯蓄がある女性でなければ融資を受けることは難しいようである．また，

なぜ女性に貸付を行うのか理由を尋ねたところ，YFA の大きな目標の一つに「女性の自立」があること，女性は男性と違ってずっと同じ土地に残ることが理由だそうだ．建築後，建物の名義は女性のものになるという．

メンタパリー村では3年前から住宅支援を開始．泥と藁でできた家が主だったが，現在はコンクリート製の家が75棟建っている．この村においてはキスタギリ村と違い YFA の審査に選ばれるとレンガなどの建築資材が無料で提供される．1棟建てるのに要する費用は 40,000 rpsうち YFA の負担分は13,785 rps．残り26,215 rpsが支払うべき金額となる．一般的に残りはYFAから融資を受ける（年率4～5％，15年ローン）

Ⅳ　女性自助グループの組織化とＮＧＯの役割

1．女性自助グループの成立と展開

女性自助グループ（Self Help Group : SHG）とは，15～20名の女性たちによって組織されるグループのことで，メンバーとなる女性たちは貯蓄能力がほとんどない貧しい女性たちである．

アンドラ・プラデーシュ州では1993年から女性の貯蓄運動が始まり，女性による自助グループが組織され始めた．現在，約40万3600もの自助グループが存在し，約580万2900人の貧困女性がメンバーとなっている．

アンドラ・プラデーシュ州がまとめた調査によると，州の女性自助グループのメンバーは450以上の収入創出活動に従事しており，メンバーの増加した世帯収入は，年間で約1000～3000ルピーであるという．グループの女性たちには，このような経済的エンパワーメントに加えて，自信や権利意識の向上，社会やコミュニティーについての意識レベルの向上もみられるという．

女性自助グループの組織化には，リーダーシップの育成や，「上から下」ではないメンバー全員の合意による決定，融資手続きの透明性の確保といった環境を必要とするが，農村の貧しい女性のほとんどが組織化に必要な知識やスキルを持っておらず，自分たちでグループを組織することはなかなか難しい．そのため，女性の組織化を支援し円滑な活動ができる環境をつくるための機関が重要となってくる．インドでは，多くの NGO が貧困女性の自助グループ結成を促進している．マハブブナガール県では，Youth For Action（略称：YFA）という NGO が女性の組織化を促し，メンバーへの支援を行っている．YFA は，1986年に設立された組織である．その基本理念は，この地域の貧困の撲滅であり，その打開策として地域の担い手である女性のエンパワーメントを行っている．

YFA が女性自助グループを組織するにあたっては，まずその村でグループ活動に熱意のある積極的な女性を村長に紹介してもらうことから始まる．村長は，さらにこのような活動に関心のある15～20名の女性を選び，YFA 職員との顔合わせの場を設ける．そこで，職員がグループの説明（グループの活動内容，ルール，YFA の活動内容など）をする．これに賛同し，メンバーになりたいという女性たちが自助グループを結成する．メンバーとしての必要条件は，18歳以上であること，メンバーとしてのルールや義務を守り，グループの目的を共有できる女性であることなどである．また，メンバーが互いに信頼できる者かどうかを判断する相互選考や YFA 職員による返済能力のチェックも行われる．メンバーは融資の返済に関して連帯責任を負うため，もし女性に返済能力がなく義務が果たせない場合，他のメンバーが不利益を被ることになりかねない．そのため，このようなチェックが行われる．

YFA 職員によると，職員がグループの結成前に村に訪れたときには，女性は全く外に出ず，職員とも話そうとしなかった．女性はそれまで仕事以外では外出せず，他人との接触もほとんどない状態だったため，YFA職員に対して恐れを抱いていたようである．職員が何度も村に足を運び女性たちとの面会を重ねていくことで，女性たちは次第に職員に対する不信感や恐怖心を払拭していった．自助グループの組織化を促す NGO にとって，女性たちにグループ結成のための動機付けを行うことが難しく，時間を要する作業である．

2．女性自助グループの主要な活動

女性自助グループが成立すると，グループメンバーによってカリカタと呼ばれるリーダーが2名選出され，この女性たちを中心としてグループの管理・運営が行われる．グループは毎月一回ミーティングを開くことになっており，ミーティングではメンバーへのお金の貸し付けのほか，女性たちのもつ悩みや問題の共有，その解決策の話し合いなどが行われる．また，メ

ンバーの権利と義務，ルールなどもミーティングで決められる．グループで重要な役割を担うカリカタは，グループミーティングの実施，グループの財政管理や議事録・帳簿の記入，また，YFA オフィスで開かれるカリカタミーティングへの参加，グループメンバーへの情報伝達や NGO・銀行など外部機関との交渉など，グループ内外において多岐にわたる仕事を担当する．

次に，女性たちが行う具体的なグループ活動について述べる．グループ活動の根幹をなすのはマイクロクレジット（小口融資）である．メンバーとなった女性たちは，毎月決められた金額（グループごとに設定するが，通常50ルピー）をグループの共同資金として積み立て，銀行に出資する．この貯蓄が増えると，メンバーはこれを元本として融資を受けることができる．メンバーへの貸付金は，生活必需品の購入や収入創出活動などに充てられる．メンバーがグループ貯蓄以上の多額の融資を受ける場合には，YFA や銀行に融資を要請する．融資金額は，一人当たり1,000ルピーから2,500ルピーで，個人に対する一回の貸付金の上限は5,000ルピーである．現在，YFAは「VELUGU」というアンドラ・プラデーシュ州の貧困削減プログラムと連携しており，これを通じて州政府から貸付金を得ている．通常，銀行から YFA への貸付の利子は貸付額の10～12%，YFA からグループへの利子は15%，グループから各メンバーへの利子は18%となっている．マハブブナガール県の高利貸しの利子が36%であるのと比較すると，マイクロ・クレジットの利子がいかに良心的なものであるかがわかる．マイクロ・クレジットの一つに，住宅建設のための融資がある．YFAはこれまで185名のメンバーに住宅ローンを提供している．一棟の住宅建設費用はおよそ75,000ルピーで，このうち YFA は建設費用として25,000ルピーを提供し，女性は残りの50,000ルピーを YFA から借り入れる．住宅を建設した女性の中には，自分の家で日用品店を開業するほか，草花栽培や家畜飼育などを行って起業に結びつけた例もある．また，女性たちが様々な知識やスキルを身につけるためのトレーニングも開始される．トレーニングには，カリカタに対するトレーニングとメンバーに対するトレーニングがある．カリカタトレーニングは，グループ管理に必要な知識やスキルの習得と，意識レベルの向上を目的としている．このトレーニングは，YFA 職員が担当する．カリカタは，このトレーニングで得た知識やスキルをグループミーティングでメンバーに説明することになっていて，メンバーに対するトレーニングの一端はカリカタが行っている．また，非識字メンバーに対する識字教育もある．このようなトレーニングは，グループ結成から3年間，重点的に行われる．このほかに，スキルトレーニングも実施されている．このトレーニングは，主に農業分野の特定スキル（接ぎ木，苗木栽培，園芸など）を習得することを目的としている．このような活動を通してグループ貯蓄が順調にすすみ，メンバーの意識レベルが向上し，グループが安定してくると，女性たちは様々な収入創出活動を開始する．中でも，ウォーターシェッド（集水域管理）に関する農閑期の活動は，臨時収入をもたらすものとして多くのメンバーが実施している．メンバーは，ブロックバンディングという溝を掘る作業や，乾燥耕地での植林，水遣り，雑草取りなどを一日8時間行い，60ルピーの賃金を得る．その他の主要な収入創出活動としては，スキルトレーニングを受講して得た知識をもとにして始める農業活動，日用品店の経営や水牛のミルク販売などがある．これらの活動は，季節や天候に左右されず年間を通して収入が得られるものであり，女性の収入の安定化に貢献している．グループが成熟してくると，メンバーの中には，AKK（Ayogya Karaya Karthas：アロゲカリカタ）と呼ばれる健康指導員として，地域の人々に対する医療サービスや健康・栄養に関する知識普及に努める者もいる．2005年8月現在，マハブブナガール県では150名の AKK が活動している．AKK の活動によって，村の女性は健康や栄養に関する知識や健康問題に対する認識を高めている．また，AKKが簡単な医療サービスを行うことで，村人は病院に行く時間と費用を節約でき，病状の悪化を防ぐこともできる．AKK は，村人から活動を認められ評価を得ることで自信をつけていくようである．その他の活動には，インド国内の女性による活動を視察するスタディーツアーがある．このツアーは年に数回実施され，ツアーに参加することで，グループ活動に対するモチベーションを高め，「自分たちにもできる」という思いを強くする女性が多いという．

表3　調査協力者諸属性　（1）氏名、年齢、就学年数、グループ参加年数、グループでの役職

氏名	年齢	就学年数	参加年数（参加年）	女性自助グループでの役職
アナンサマ	35歳	教育なし	1年（2004年）	なし
パルバティ	22歳	教育なし	1年（2004年）	なし
ジョーティ	22歳	聞き取りせず	5年（2001年）	カリカタ
バヤラクシマ	29歳	12年（上級中等学校卒）	5年（2001年）	カリカタ
バルタマ	38歳	10年（中等学校卒）	12年（1994年）	カリカタ
ソリューショナマ	38歳	10年（中等学校卒）	12年（1994年）	カリカタ

（女性メンバーへのヒアリングより作成）

表4　調査協力者の女性自助グループの活動

氏名	マイクロクレジット ローンの使用用途	受講したトレーニング	収入創出活動	AKK	その他の活動
アナンサマ	住宅		ウォーターシェッド	×	
パルバティ	農業、水牛購入	農業トレーニング	水牛のミルク販売	×	
ジョーティ	農業	カリカタ・AKKトレーニング、農業トレーニング（苗木栽培）	苗木栽培、ウォーターシェッド	○	
バヤラクシマ	子どもの養育費	カリカタトレーニング		×	
バルタマ	農業	カリカタ・AKKトレーニング、農業トレーニング（接ぎ木、有機堆肥、苗木栽培）	苗木栽培手伝い、ウォーターシェッド	○	
ソリューショナマ	農業	カリカタ・AKKトレーニング、農業トレーニング（害虫対策、農業生産性向上）	水牛のミルク販売（昨年より開始）、ウォーターシェッド	○	スタディーツアー参加

（女性メンバーへのヒアリングより作成）

表5　収入源と現金収入における変化

氏名	女性自助グループ参加前	女性自助グループ参加後
アナンサマ	日雇い労働（40ルピー／日）	日雇い労働（40ルピー／日）、臨時収入ウォーターシェッド（60ルピー／日）
パルバティ	仕立屋（50ルピー／日）	仕立屋（50ルピー／日）、水牛のミルク販売（50ルピー／日）
ジョーティ	小農・日雇い労働（無給労働）	小農・日雇い労働（40～50ルピー／日）、健康指導員（200ルピー／月）、臨時収入ウォーターシェッド（60ルピー／日）、苗木栽培（1000ルピー／月）
バヤラクシマ	日雇い出稼ぎ労働（50ルピー／日）	アンガンワディ・ティーチャー（50ルピー／日）
バルタマ	小農（収入は聞き取りせず）	小農、健康指導員（200ルピー／月）
ソリューショナマ	小農・日雇い労働（7～8ルピー／日）	小農・日雇い労働（40ルピー／日）、健康指導員（200ルピー／月）、水牛のミルク販売（50ルピー／日）

※グループ活動を通して得られた収入は下線で表記している。　（女性メンバーへのヒアリングより作成）

3．女性メンバーのエンパワーメント

1）ヒアリング調査からみた女性のエンパワーメント

ここでは，女性自助グループのメンバーに対する聞き取り調査をもとに，女性たちがどのようにエンパワーしていくのかをみていく．調査協力女性の属性と活動状況は，表3・4に示した．女性グループへの参加動機は，収入の獲得や貯蓄ができるようになるといった経済的効果への期待が多かった．

女性たちが経済力をつけることは，生活の安定化と直結し，女性のみならず家族全員がその恩恵を受ける．ここでは，女性たちがグループに参加することで収入にどのような変化が起こったのかを考察する．表5は，女性たちの収入源と現金収入における変化を示してい

る．パルバティ以外の5名が，グループ参加前は農業日雇い労働者として低賃金で雇われていたが，グループ参加後には6名全員の収入源が複数化し，現金収入が向上していることが分かった．女性たちは，ウォーターシェッドや水牛のミルク販売，苗木栽培などを行い，現金収入へのアクセスを拡大させている．また，乾季にほとんど雇用がないこの県で，女性たちが年間を通して収入を得られる仕事を確保したことは，活動の大きな成果の一つといえる

女性たちは，自助グループに参加することを通じて，貯蓄を開始し小口融資を受けて現金への容易なアクセス権を獲得している．さらに，トレーニングではグループ管理に必要な知識やスキルの他，農業に関する技術なども学び，農業生産性の向上に役立てている．数々の収入創出活動は，女性たちの現金収入源の確保と収入の向上を生み，女性たちは安定した生活を実現させている．また，農業生産性の向上は，世帯の収入の向上だけでなく村の出稼ぎ者数の減少にもつながる．ある村の村長は，グループが結成され，乾季に雇用の機会を得られたことで，出稼ぎ者数が減少したと話していた．また，「グループメンバーとなって最も良かったことは何か」という質問に対して，聞き取り調査をした女性全員が「知識を得たこと」「自分自身を高める方法を得たこと」と答えていた．

2）女性の意識の変化

ここでは，グループに参加した女性たちの世帯内での変化，女性の意識の変化，行動の変化に着目して考察をすすめる．まず，女性達の世帯内での変化についてであるが，グループ参加後にみられた変化として，家族とりわけ夫との関係が良好になったことがある．この県では，「女性は家にいて家事に従事するべき」という社会的概念が強く，多くの女性が仕事以外で外出することはほとんどない状況であった．しかし，グループ参加後には，女性たちは，「夫と対等な関係でいられるようになった」，「外出を許可されるようになった」と話していた．また，世帯の家計管理に着目すると，グループ参加前は夫が担当していたが，グループ参加後にはパルバティ以外の5名が世帯内の家計管理に携っていた．これらの変化の背景には，女性たちがグループ活動を通して自ら収入を獲得・向上させたことや，住宅などの所有物を確保したことが考えられる．また，女性たちがグループ活動から様々な利益を得ていることを知り，夫がその活動を認めるようになったことも背景にあるといえる．

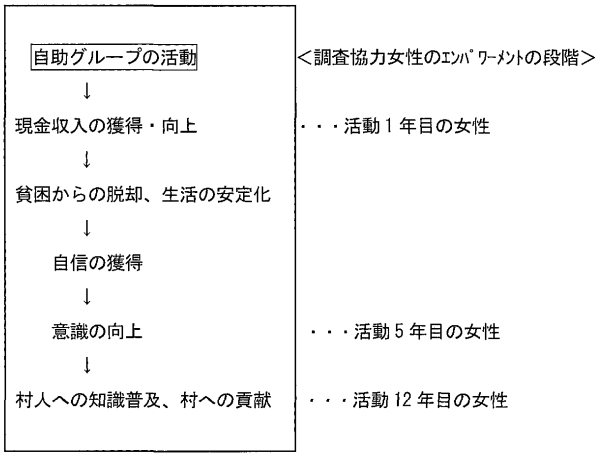
女性の意識の変化については，教育についての意識の変化と健康・栄養についての意識の変化が何人かの女性に共通してみられた．教育意識の変化が見られるのは，バルタマ，ジョーティ，バヤラクシマで，グループ参加後，自分の子供を教育水準の高い私立学校への通わせるようになった．その理由は，「グループに参加して知識を得ることの重要性を学んだからだ」と述べていた．健康栄養の意識変化は，AKKとして活動する女性たちに見られた．医療についてトレーニングを受けた女性たちは，「もっと健康に気をつけて生活すべき」という意識を持って実践していると同時に，それをグループメンバーや村の女性たちにも普及させようとしている．

女性の行動の変化として女性全員に見られたのは，一人で外出できるようになったと人と話せるようになったこと，さらに発言力が増した，の3つである．グループ参加前は外界との接点がなかった女性たちにとって，一人で外出できるようになったことはグループ参加によって得られた成果の一つといえる．女性の行動範囲の拡大は，以前より多くの資源（ローン，医療，ミーティングなど情報提供の場）へのアクセスを容易にし，女性の能力を開花させる場も広がると考えられる．人と話せるようになったと答えたのはバルタマ，バヤラクシマ，ソリューショナマの3名で，グループ活動を通して「人との話し方や話の聞き方を学んだ」と話しており，これがグループ参加から得られた成果の一つだと述べていた．女性たちは，ただ人と話せるようになっただけでなく，YFA職員や銀行員，政府関係者など様々な立場の人と話ができるようになったとも言っていた．発言力が増したと答えた女性たちは，夫に対して不満を言えるようになったことや，ミーティングでの発言力が増したことなどを挙げていた．

3）女性のエンパワーメントの特徴

今回聞き取り調査をした6名の女性たちに見られるエンパワーメントをみると，そこには共通する過程がみられる．まず，女性たちの収入が向上し，経済力をつけた女性たちは自信をつけ，トレーニングなどから知識や情報を得て，さらにそれを村人に普及させよう

図4　女性たちのエンパワーメント過程のモデル



（筆者作成）

と活動している．このことから，女性のエンパワーメントは，図4のように段階的に達成するものであり，その第一の段階が経済的エンパワーメントであると考えられる．そして，女性のグループ参加年数によって，この過程に違いが見られる．活動歴1年の女性たちは，経済的エンパワーメントの段階であるのに対し，リーダーで活動歴5年の女性たちは，収入創出活動を実施し，健康指導員としても活躍している．リーダーで活動歴12年の女性たちは，活動で得られた知識をグループメンバーのみならず，村の女性たちに普及させることに尽力し，その活動範囲も広い．グループの参加年数を経るごとに，女性たちの活動の幅は広がり，習得する知識や技術も多くなっていく過程が見られる．このことから，女性のエンパワーメントは，段階的かつ持続的に達成されていくものであるといえる．

Ⅴ　おわりに

本研究では，貧困が深刻なアンドラ・プラデーシュ州マハブブナガール県において，女性のエンパワーメントがいかにして達成されるのかを，女性自助グループの組織化とその活動に着目してみてきた．女性のエンパワーメントに関して明らかになった点は二点ある．一点目は，女性のエンパワーメントは，女性自助グループの組織化及びその活動によって達成されているということである．二点目は，女性のエンパワーメントは，段階を踏んで持続的に達成されていることである．また，女性自助グループの組織化にはNGOが重要な役割を担っていることがわかった．

今後の課題として以下の点を述べたい．聞き取り調査の中で，ソリューショナマは，「村人は，私がYFAからお金をもらって活動していると思っている」と話していた．彼女のこの語りは，村における女性自助グループの理解度の乏しさを示していると考えられる．村人の理解度の乏しさが，女性たちの活動を妨げることもあり得る．今後は，村人の理解度を向上させるための活動も必要になってくるだろう．近年の動きとして，男女混合の自助グループがYFAの支援によって組織され始めている．男性も活動に参加することで，自助グループに対する村人の理解度が向上することが期待される．最後に，マハブブナガール県の女性自助グループの今後の可能性について若干の考察を加えたい．今回，聞き取り調査を行った女性たちは，グループ活動を通して個人としてのエンパワーメントを達成した段階にあるといえる．経済的な成果のみならず，家庭内での家計管理や家族との関係における変化，女性自身の自信の獲得や意識の向上は，グループ活動の大きな成果といえる．しかしながら，グループが共同で何かの事業を行うというようなグループ集団としてのエンパワーメントはあまり見られなかった．個人としてのエンパワーメントが達成された今，次なるエンパワーメントの段階として，集団としてのエンパワーメントが期待される．YFAは現在，村の若い女性たちに手芸の技術を教える「手芸教室」を毎週一回実施している．将来的には，女性たちが作った商品を市場で販売するという．このように，女性たちが共同で事業を始め，それが発展すれば，YFAの支援を受けずとも自分たち自身でグループ活動の運営が可能になる．女性たちがエンパワーメントの次なる段階へとすすみ，活動を継続させていくためには，女性たち自らが組織を強化していくことも必要不可欠であると考えられる．

本研究の執筆分担はⅢが福澤，Ⅳを吉成が担当し，Ⅰ，Ⅱ，Ⅴの編集・調整を小金澤が担当した．この研究は，福澤の修士論文の前半部と，吉成の卒業論文を元に編集した．調査に当たっては，YFAの代表ベンカット氏に全面協力を得た．記して謝意を表したい．

参考文献

阿部治（2004）「自然と人間が調和した持続可能な未来社会への展望」農村文化運動172　農文協

斉藤文彦（1999）「パワーの類型化によるエンパワーメント戦略の考察」女性のエンパワーメントと開発―タイ・ネパール調査から―，開発と女性に関する文化横断的調査研究報告書（平成6年度～10年度）国立婦人教育会館　pp109～123

佐藤宏（1994）『インド経済の地域分析』古今書院

須田敏彦（1999）「インドの農村協同組合―自由化の中で自立をめざす農協組織―」農林金融1999年6月号

田中由美子・大沢真理・伊藤るり編(2002)『開発とジェンダー―エンパワーメントの国際協力』国際協力出版会

村松安子（2005）『「ジェンダーと開発」論の形成と展開―経済学のジェンダー化への試み』未来社

山本剛郎（2000）『現代インド社会の変動過程』ミネルヴァ書房

渡部忠世（1997）『アジアの農耕様式』大明堂

Dev, S. Mahendra: Mahajan, Vijay (2003) "Employment and unemployment" *In Economic and Political Weekly* (Bombay : Sameeksha Trust), 38 (12/13), Mar. 22/29 pp. 1252-1261.

Youth for Action (1997) "Opportunities for marketing and sustainable employment in Mahaboobnagar District"

Youth for Action (1998-2004) "Annual report"

注

1）国連開発計画（1995）p.5

2）ibid, p.5

3）斉藤（1999）p109

4）この語族は，テルグ語族，タミル語族，カンナダ語族，マラヤーラム語族である．

5）Dev. Mahajuan (2003) P.1256

6）2006年1月現在，1ルピー＝2.58円

7）岩手県の面積は，15,278㎢

8）インドの政策では，政府が肥料会社に補助金を出して，化学肥料の価格を安くしている．

9）水と同時に肥料を供給することもある．

10）1 ac = 40.469a = 4046.9㎡

11）Di Ammonium Phosphate ＝リン酸水素アンモニウム

（平成18年9月29日受理）